

### 実務者会議で

第13回市長会議の開催計画が明らかに！

世界冬の都市市長会(WWCAM)実務者会議が、次期市長会議開催都市ヌーク市(グリーンランド)において7月に開催され、会議の実施計画やテーマ、市長会の運営などについて協議を行い、下記のとおり決定しました。

#### < 第13回市長会議開催計画案 >

##### 期 間

2008年1月17日～20日

##### 全体テーマ

「北極圏における気候変動」

##### 会議テーマ

「地球温暖化の影響を抑制する手段」

「冬の都市における持続可能な発展」

市長会議と同時に開催される「冬の見本市」、「冬の都市フォーラム」のテーマも、市長会議と同じ「北極圏における気候変動」とし、北極圏から地球環境問題を世界に向けて発信したいとの意気込みがヌーク市から表明されました。

氷河の後退などに代表される北極圏の気候変動の問題は、地球全体の温暖化への警鐘であり、北極圏の居住者だけではなく、地球に住む者すべてにとって死活的な問題です。市長会議において、各会員都市が地球温暖化対策の事例を紹介し、知恵と経験を共有して、冬の都市が団結して最大限の努力を示すことが、ひいては北極圏の環境問題対策につながることを期待されます。

### 冬の都市環境問題小委員会

本年1月の第12回市長会議(中国・長春市)で設立された「冬の都市環境問題小委員会」の第1回会議も行われ、小委員会で取り扱っていくテーマや、今後の活動期間などについて協議しました。

テーマは「地球規模での環境問題」とし、2008年の第13回ヌーク市長会議までの2年間を「環境について各会員都市で共通認識をもつ期間」とし、その後プリンス・ジョージ市(カナダ)で開催される2010年市長会議までの2年間を「環境問題に対する行動期間」として共通のキャンペーンを行うなど、小委員会の成果を世界に向けて発信することが、全会一致で決まりました。

小委員会では、ヌーク市、アンカレッジ市(アメリカ)、太白市(韓国)から、それぞれの都市の環境対策の事例も紹介されました。

### ロシア・マガダン市加入～会員20都市に！

長春会議にオブザーバーとして参加したロシア連邦のマガダン市が、2006年7月正式に会員都市となり、世界冬の都市市長会の会員は、11カ国20都市となりました。

マガダン市は、2009年に創設70周年を迎える歴史の浅い都市です。金鉱脈が豊富なこの街は、数奇な運命をたどり、その歴史は開拓者のロマンにあふれている一方、ソビエト時代の悲しい過去も記されています。

市の人口は、10万7,300人。冬の寒さは厳しく、一月の平均気温はマイナス19.5度で、マイナス30度まで下がることもあります。10月に初雪が降り、降雪は5月まで続きます。12月の最深積雪は105cm、5月は115cm。夏は短く、降雨量も多く、7月の平均気温は8.8～11.1度で、6月から8月は白夜が続きます。

主な産業は、機械製造、輸送、金属加工、漁業や海産物加工業、農業などで、環太平洋諸国とパートナーシップを結んでおり、アメリカ、日本、韓国の提携企業と燃料の輸出入に関し業務提携を行っています。

科学、文化、教育の中心都市で、科学研究施設やロシアの主要大学の分校もあります。国際関係の進展も著しく、アンカレッジ市(アメリカ)、敦化市(中国)、エルガヴァ市(ラトビア)と姉妹都市提携を結んでいます。

### アンカレッジ市の環境対策事例

アンカレッジ市市長補佐官 デイヴィッド・ラムザー氏

現在、アラスカ州では地球温暖化の影響により氷河が溶け出し、白クマが溺れ死んだり、サーモンに新種の病気が見つかるなど生態系に深刻な問題が発生しています。そのため、地球温暖化を地域の問題としてもとらえ、取り組みを行っています。

例えば、豊富な風力を活かした発電や、ゴミ処理場から発生するメタンガスを再利用した発電など、環境に優しいエネルギー対策を進めています。また、家庭から出る廃油をディーゼルと混ぜて車の燃料に再利用したり、ガラスを細かく砕いて鉄道の摩擦材に再利用するなどリサイクル対策も行っています。

さらに、公共施設などでは、最新の省エネ型暖房、空調設備を取り入れて二酸化炭素の排出量を減らすとともに、施設のランニングコストの圧縮にも努めています。また、公共施設におけるエネルギー効率の向上を命じる条例も策定する予定です。

その他、気候変動に関する会議を誘致したり、近隣諸都市との連携も積極的に進めています。

## 冬の見本市でのユニークな出展 ~ 生杉建設:エネルギー効率の良い住宅

2006年1月市長会議と同時に開催された冬の見本市には、地元中国および海外から200を超える企業・団体が出展し、日本からも24の企業・団体が参加しました。今号では出展企業の一社、生杉建設を紹介します。

生杉建設では、土台、梁、柱など家の骨組みを外側から断熱材で丸ごと包み込む「SHS(スタイロ・ハウス・システム)」という工法で住宅を建設しています。この工法では、熱のロスが少なく、少ないエネルギーで全室冷暖房が可能のため、住宅内部の温度差がなく、一年中快適に暮らせるのが特徴です。また、骨組みが外の寒さにさらされないため、結露が起こりにくくカビやダニの繁殖を防いでアレルギー性皮膚炎や小児喘息などの原因を除去し、建物を長持ちさせ、健康的な居住環境を維持することが出来ます。

## 共同プロジェクト:盛夏の北京で冬の魅力をPR

世界冬の都市市長会では、中国・北京で6月22日から24日まで開催された「北京国際旅遊博覧会2006」で共同観光PRを行い瀋陽市、長春市(中国)、太白市(韓国)、青森市、札幌市(日本)の5都市が参加しました。

北京では、冬でも雪が少なく、旅遊博の期間中は気温が30度に達する日が続いたこともあり、冬の魅力をアピールするビデオや写真に、涼を求める大勢の来場者が見入っていました。

旅遊博には、60以上の国と地域から600を超える団体が出展しましたが、冬という特定の季節に焦点をあてた世界冬の都市市長会の共同出展はユニークな観光PRとして注目を集め、地元ラジオでも紹介されました。

## WWCAM 会員都市間交流

### ウランバートルから札幌市に研修生

世界冬の都市市長会では、会員都市同士が関心のある分野に応じて交流を行っており、札幌市では、2001年以来毎年ウランバートル市役所職員を研修生として受け入れています。2005年には国際交流部のボルド・カヤンガラフさんが来札し、日本の行政組織について学びました。ウランバートル市では、市外から多くの人が入り、空き地にゲルを建てて住むようになったことから大気汚染が進んでいます。1998年に世界冬の都市市長会の会員となったウランバートル市では、市長会活動の中で除雪や環境対策について学び、まちづくりに活かしたいと期待しています。

## 冬の都市フォーラム

~地球にやさしい燃料 "ペレット"について~

本年1月中国・長春市で行われた第12回世界冬の都市市長会議では、冬の都市フォーラムが併催され、様々な分野から28名の専門家や学術研究者が冬のライフスタイルやまちづくりについて発表を行いました。今回は、環境にやさしい燃料として近年注目を集めている「木質ペレット」に関する2つの発表を紹介します。

## カルマル市における木質ペレットの活用について スウェーデン・カルマル市役所 ポー・リンドホルム氏

カルマル市では、総発電量の47%をペレットを利用して発電しており、バイオマスの先進国スウェーデンの中でも、特に先進的な取り組みを行っている都市です。

木質ペレットとは、木を伐採した時に出る木くずなどを粉末にし、添加物を加えず固形化した燃料で、燃焼する際二酸化炭素をほとんど排出せず、森林資源を再利用できることから、環境負荷の少ない燃料として近年注目されています。カルマル市では20年前からこのペレットに着目して活用を進めており、現在一般家庭の暖房だけでなく、火力発電にも使用し、多くの分野に電力を供給しています。その結果、市の二酸化炭素排出量は20年前の1/10以下と大幅に削減されました。

カルマル市では、今後法的な規制だけにとどまらず、エネルギー使用や二酸化炭素排出にかかる税金、ペレット導入への助成金、電力取引の規制緩和など経済的な誘因と併わせ、さらに木質ペレットの普及を進めていく予定です。将来は、石炭、石油などの化石燃料から100%脱却することを目指しています。

## 北海道・足寄町におけるペレットの挑戦

足寄町木質ペレット研究会会長 中島正博氏

足寄町は人口約8,500人、地域の80%が山林で林業が盛んな町です。地域経済活性化策として、豊富な山林から出る廃材に着目し、4年前から木質ペレットの製造を始めました。製造にあたって、スウェーデンで勉強を始めましたが、その時に指導を受けたのが、ポー・リンドホルム氏です。

試行錯誤を繰り返し、2003年に民間企業、研究機関、行政からなる足寄町木質ペレット研究会を発足させ、2005年には14社からなる十勝ペレット協同組合を設立して、ペレットの製造施設を完成させました。しかし、国内ではペレットの知名度が低く、需要は少ないなど、多くの課題がありました。また、様々なエコ・エネルギーが登場してきており、今後はそういった他のエコ・エネルギーとの競争力も求められることになるでしょう。

しかし、化石燃料への依存から脱却し、地球温暖化対策を進めるためには、現時点ではこの木質ペレットは最適なエネルギーであり、今後も木質ペレットの普及に向けて挑戦していくつもりです。